

0歳児クラスの保育における保育者の視線の意味

Significance of looking of childcare workers in young infant classes

星野 優芽

Yume Hoshino

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 保育・教育学専修

キーワード：保育，保育者，視線，乳児

Key words : Childcare, Childcare worker, Looking, Infant

1. 問題と目的

保育は、「子ども理解」→「ねらい」→「手立て」→「評価（子ども理解）」というサイクルとして捉えることができ（岡，2019），その起点となる「子ども理解」が重要である。「子ども理解」とは，子どもの事実を拾いさらにそこからその子どもの育ちを解釈することであるが，0歳児クラスにおいては子どもが自在に言葉を扱うことができないため，非言語的な表出を事実として捉える必要がある。本研究では，そうした非言語的な表出を捉える保育者の視線に着目する。小沢・遠藤（2001）は養育者と子どもの関係の中にある視線をとらえ，社会的参照の発達プロセス（巻き込まれ型の社会的参照→相補型の社会的参照→自律型の社会的参照）を見出した。

そこで本研究においては上記の3つの型を思考モデルとし，0歳児クラスの保育における保育者と子どものやりとりの実態と，そうしたやりとりにおける保育者の視線の実態を明らかにすることを目的としている。そこから保育者の意図がどのように存在しているのかを検討し，その上で，保育者の視線が0歳児クラスの保育における専門性として，どのような意味を持っているのかを考察している。

2. 研究方法

＜対象＞

保育所0歳児クラスの子ども12名と担任保育者1名

＜手続き＞

石橋ら（2018）の研究を参考に，ウェアラブルアイトラッカー（Tobii Pro グラス2）を用いて保

育中の保育者の視線を計測し，同時に保育者の視野に映る子どもの非言語的な表出を記録する。加えて，ICレコーダーを用いて音声を集集し，ビデオカメラを用いて保育者の表情を記録する。

＜データの整理＞

収集したデータから，子どもと保育者との関わりをエピソードとして文字に起こし，その実態をやりとりとして表に整理した（総エピソード数196例，総やりとり数385例）。

やりとりの分類においては小沢・遠藤（2001）を，やりとり中の保育者の意図においては篠原（2006）を思考モデルとして検討した。

3. 結果

3. 1. 子どもと保育者のやりとりの実態

やりとりの分類においては“子どもが保育者に向ける視線”（自律的な視線，相補的な視線，巻き込まれ的な視線）と“子どもと保育者の関係性”（自律型の関係，相補的な関係，巻き込まれ的な関係）の2つの観点から分類した。その結果，子どもと保育者のやりとりは，以下の6つに分類できることが明らかになった。

自律型：自律的な視線，自律型の関係

自律的相補型：自律的な視線，相補型の関係

相補的自律型：相補的な視線，自律型の関係

相補型：相補的な視線，相補型の関係

巻き込まれ相補型：巻き込まれ的な視線，

相補型の関係

巻き込まれ型：巻き込まれ的な視線，

巻き込まれ型の関係

3. 2. 視線に見る保育者の意図性

実際のやりとりにおいて、視線は図 1. のように存在すると考えられる。

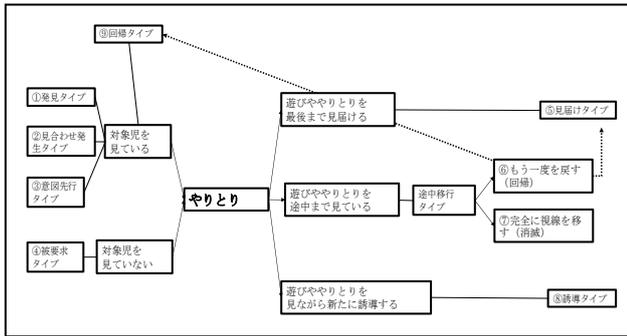


図 1. やりとりに係る保育者の視線の実態

- ①: 既に対象児のみ、もしくは対象児とその遊びを見ている
- ②: 意識、無意識に関わらず対象児のふり返りが生じる
- ③: 意図を対象児に向けることでやりとりが始まる
- ④: 対象児から働きかけられることによって保育者が視線を向ける
- ⑤: 遊びややりとりを最後まで見届ける
- ⑥: 遊びややりとりの途中で、保育者が意図を別の対象（保育者や子ども）に移行し、その後再び当初の対象児に戻る
- ⑦: 移行したまま別の対象に視線を向け続ける
- ⑧: 遊びややりとりを見ながらも新たな遊びや行為へ誘導する
- ⑨: 途中移行タイプの視線の後、再び同じ対象児のもとに戻る

3. 3. やりとりの型と保育者の視線の関連

やりとりの型と保育者の視線の関連を整理すると、図 2. のようになる。

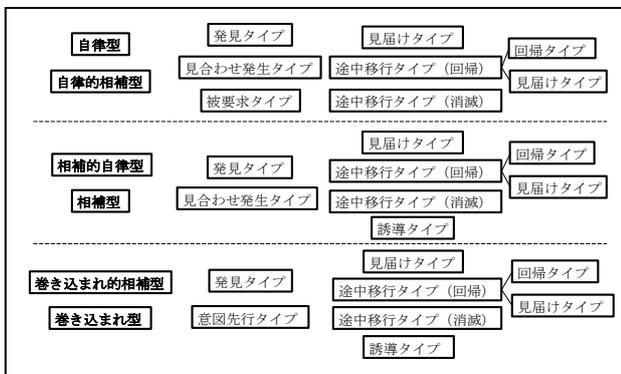


図 2. やりとりの実態と保育者の意図性
保育者が子どもに視線を向けていることでやり

とりが始まるのは、その働きかけの意図を既に有した状態で子どもに視線を向けていると考えられる。もしくは視線自体は無意識的であっても、子どもの姿を捉え、その子どもに触発されるようにやりとりが生まれ、そこに保育者の意図や思いが込められることで日々の保育がなされていくと考えられる。

4. 考察

やりとりとそれに絡む保育者の視線は、保育における専門性としての意味を持つと考えられる。

まず、やりとりにおける「自律型」「相補型」の働きかけと、それに伴う「発見タイプ」「見合わせ発生タイプ」「被要求タイプ」の視線は、子どもの姿を保育者が捉える視線となり、子どもの事実を拾い、そこからどのような遊びをしているのか、何をどのように楽しんでいるのか、そこからどのような力が育っているのかを捉えるため、「子ども理解」としての意味を持つ。次に、やりとりにおける「相補型」「巻き込まれ型」の働きかけと、それに伴う「意図先行タイプ」「誘導タイプ」の視線は保育者が意図を持ったうえで働きかけるため、「手立て」としての意味を持つ。最後に、やりとりが終わる際に見られる「見届けタイプ」の視線は、子どものやりとり後に対象への向かう姿に注目し、そのやりとりにおける「評価」としての意味を持つ。

このように 0 歳児クラスの保育においては、保育者の視線がその専門性としての意味を持って存在していると言える。

5. この助成による発表論文等

(1)学会発表

- ①星野優芽「保育所 0 歳児クラスにおける保育者と 0 歳児のやりとりの実態」日本発達心理学会第 31 回大会 2020 年 3 月 4 日 大阪府大阪市
- ②星野優芽「乳児保育における視線の持つ意味」日本保育学会第 73 回大会 2020 年 5 月 16-17 日 奈良県奈良市（発表確定）

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所平成 31 年度大学院研究助成 (B) 課題番号 DB1920「0 歳児クラスの子ども理解における保育者の視線の役割」を受けて行ったものである。

主要参考文献

- [1] 岡健編著(2019)「演習 保育内容 環境 —基礎的事項の理解と指導法—」建帛社
- [2] 石橋美香子・高橋翠・野澤祥子(2018)「食事場面における保育士の視線行動の探索的検討 —ベテラン保育士は顔を見ない?—」『信学技報』, HIP2018-55(2018-08)69-72
- [3] 小沢哲史・遠藤利彦(2001)「養育者の観点から社会的参照を再考する」『心理学評論』(44-3):271-288
- [4] 篠原郁子(2006)「乳児を持つ母親におけるmind-mindedness 測定方法の開発 —母子相互作用との関連を含めて—」『心理学研究』(77-3)244-252